

◆2023年5月24日発行ラインナップ◆
 ・農産物の輸出拡大
 ・キウイの話

農産物の輸出拡大～生産者の救世主となるか～

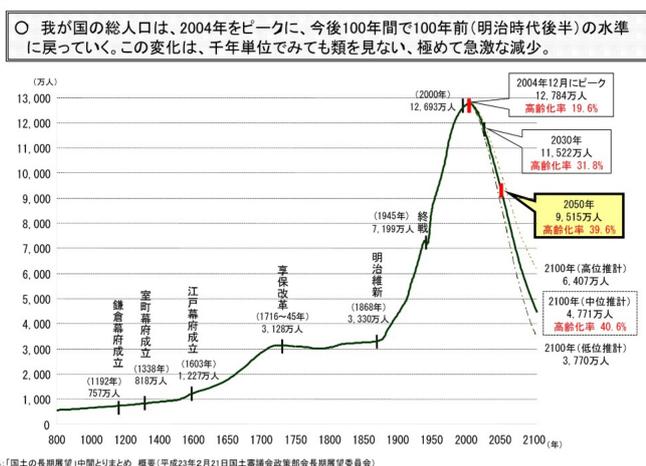
日本の人口は2050年には9,515万人になると予想されている(図1※)。人口の減少とともに農産物の消費も減少するが、農家数も減少し高齢化が進むと予測されている(図2※)。

日本の食料安全保障の議論も深まってきているが、国民全体に浸透しているとは言いがたい状況だ。青果物店、スーパー、道の駅など日本全国どこに行っても農産物が販売されており、日本近海で有事の際には農産物が日本の食卓から消えることも起こりうるなど多くの国民は想像がつかない。日本の農業関係者の努力により戦後の食料不足は解消し、昭和～平成～令和に至り豊かな食生活が実現されてきた。しかしながら日本の農業は農機具やハウスのエネルギー源、肥料の原料など海外依存度が非常に高く食料安保を考えると脆弱な産業であるという現実を再認識しないといけない。そんな厳しい現実の農業現場ではあるが、国産農産物の日本国内消費だけでなく輸出によって農業の活性化を図るべく政府は後押しを始めている。

農林水産省は農産物の輸出拡大に向けた取り組み方向を示しており(表1※)、それによると2030年度の金額ベース目標は2019年度実績比、お米で約6倍、ぶどう・いちごで約12倍、緑茶で約5倍と設定している。「品目毎の課題に応じた取組の強化」も示している。どれも栽培面積の減少を食い止めることを課題に挙げているが、それだけでなく収穫時の人手不

(次ページへ続く)

我が国における総人口の長期的推移 (図1)



基幹的農業従事者数の年齢構成 (2022年) (図2)



○2022年における基幹的農業従事者数は123万人、平均年齢は67.9歳(2021年)で、年齢構成は70歳以上の層がピークになっている。

○今後10年から20年先を見据えると、基幹的農業従事者数は大幅に減少することが確実であり、少ない経営体で農業生産を支えていかねばならない状況。

品目毎の輸出額の目標/品目毎の課題に応じた取組の強化 (表1)

品目	2019年実績	輸出額の目標		取組内容
		2025年	2030年	
穀物等	462億円	1,101億円	2,961億円	海外の日本食レストランやおにぎりビジネス向けに日本産米の魅力进行PRし、海外需要を拡大するとともに輸出向けの米の作付を拡大
米	46億円	97億円	261億円	
野菜・果実等	445億円	924億円	2,306億円	近年の樹園地の減少を食い止めるとともに、水田の園地等への転換、省力樹形等の導入により生産を拡大し、増産分を輸出
りんご	145億円	177億円	279億円	
ぶどう	32億円	125億円	380億円	
いちご	21億円	86億円	253億円	
かんしょ	17億円	28億円	69億円	近年の生産面積の減少を食い止めるとともに、輸出に好適な「べにはるか」等の生産を行う輸出産地を育成して増産分を輸出
その他農産物	991億円	1,449億円	2,545億円	近年の栽培面積の減少を食い止めるとともに、海外の規制に対応した茶の生産を拡大し、特に海外でニーズがある有機栽培茶や抹茶向けのてん茶の生産を拡大
緑茶	146億円	312億円	750億円	

(前ページより続く)

足の解消も大きな課題だ。上述したように農業従事者の減少と高齢化(図2)は避けて通れない現実である。農産物の収穫において海外からの研修生に依存している作物も多いが、今後の収穫ロボット技術や様々な農業アシスト技術の進歩により課題が解決されることを願いたい。中小規模の酒蔵が日本酒の輸出によって業績をアップさせている良い実例もある。日本国内での消費が減少しているお米や緑茶、果物が輸出によって盛り返し、生産者の収入が増えれば若い跡継ぎや新規就農者が増える好循環になることを肥料業界としては大いに期待したい。

図2にある「20年後の基幹的農業従事者の中心となる層」の方々と対面する肥料商は、彼らと如何に取り組んでいくのかを考える必要性が極めて高い時期に来ている。

※図1.出典元(<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001412278.pdf>)

※図2.出典元(https://www.maff.go.jp/j/study/attach/pdf/nouti_housei-1.pdf)

※表1.出典元(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/nousui/yunyuuokoku_kisei_kaigi/dai7/siryousu2.pdf)

～キウイの話～

昨今様々なフルーツがスーパーで並ぶようになりました。昔はりんごといえば赤でしたし、ぶどうといえば紫をイメージされる方が多かったと思います。今はりんごもぶどうも緑がずいぶん定着してきたという印象を感じています。

さて、キウイといえば緑の Hayward 種がやはり一番思い浮かびます。近年では黄色のゴールドキウイも一緒に店頭で並んでいることも多く、なじみが深くなりました。海外ではニュージーランドの印象が強いですが、中国やイタリアでも生産されています。日本では輸入するキウイのうち実に9割がニュージーランド産で、年間106,000t輸入しています。また、国内では年間19,700tのキウイが生産されています。国内だと、愛媛県や和歌山県、福岡県など、柑橘類を栽培している産地と被っている傾向があります。国産の流通時期は12月から3月頃に限られますが、南半球であるニュージーランド産で国産が出回らない季節を補えるため、現在では通年で店頭で並んでいます。

実はキウイには果肉が赤いキウイも存在します。既存のキウイと比較して、平均糖度18度と甘みが強く渋みが少ないことが挙げられます。国内では福岡県や静岡県で栽培されていて、国内において最も早生のキウイであり、9月下旬から10月上旬に出荷されています。海外でも赤いキウイの品種改良はすでに取り組みされていて、ニュージーランドでは20年近く改良している品種が栽培されており、4月から5月に一部販売されているようです。

では、何故市場ではあまり見かけないのでしょうか。これは、赤いキウイの糖度がとりわけ高く国内外の品種を問わず、貯蔵・保管が難しいということが挙げられます。緑のキウイ(平均糖度14度)と黄色のキウイ(平均糖度16度)を比較した際、糖度の高い黄色のキウイの方が熟しやすいように、糖度が上がることで貯蔵性は一般的に低下するため、赤いキウイが市場に出回らないという現象が発生するというわけです。

これから梅雨がやってくる季節、キウイもおいしい時期になります。じめじめとした季節をおいしいキウイと乗り切っていきましょう。(東京支店)

エアコンフィルター掃除する前に真夏日がきてしまいました。何事も早めの準備が必要ですね。

原産国別輸入数量の推移(図4)



原産国別輸入数量推移(東京税関より引用)



ニュージーランド産レッドキウイの断面